

学部・研究科等の教育に関する現況分析結果

学部・研究科等の教育に関する現況分析結果（概要）	教育 0-1
1. 工学部	教育 1-1
2. 工学研究科	教育 2-1

学部・研究科等の教育に関する現況分析結果（概要）

学部・研究科等	教育活動の状況	教育成果の状況	質の向上度
工学部	期待される水準にある	期待される水準にある	質を維持している
工学研究科	期待される水準にある	期待される水準にある	質を維持している

工学部

I	教育の水準	教育 1-2
II	質の向上度	教育 1-4

I 教育の水準（分析項目ごとの水準及び判断理由）

分析項目 I 教育活動の状況

〔判定〕 期待される水準にある

〔判断理由〕

観点1-1「教育実施体制」について、以下の点から「期待される水準にある」と判断した。

- 工学の知識を幅広く身に付けた人材を育成するため、学科の枠を超えて科目を履修できる工学創造プログラムを導入し、学科横断型及び学際領域の教育を行っている。
- 工学教育総合センターのアドミッションオフィス、キャリアサポートオフィス、創造教育開発オフィスが相互に連携して入学から学修、卒業及び就職までを総合的に把握し、継続的な学生支援を推進するとともに、工学教育の質を向上するための活動に取り組んでいる。

観点1-2「教育内容・方法」について、以下の点から「期待される水準にある」と判断した。

- 学生が自ら目標を設定する能力を育成するため、専門教育科目として学生自身が科目を系統的にデザインして履修する自己設計科目を開講し、20単位修得させている。
- 学習ポートフォリオを整備し、分野別に学生の学習成果を可視化するなどして、学生が自らの学びを振り返ることができる環境を整備している。
- 学習意欲の高い学生の主体的な活動を支援するため、文部科学省「理数学生応援プロジェクト」に採択された名工大 TIDA プログラムを平成 21 年度から平成 27 年度に実施しており、学生を特別受講生として海外研究機関へ派遣している。

以上の状況等及び工学部の目的・特徴を勘案の上、総合的に判定した。

分析項目Ⅱ 教育成果の状況

〔判定〕 期待される水準にある

〔判断理由〕

観点2-1「学業の成果」について、以下の点から「期待される水準にある」と判断した。

- 第2期中期目標期間（平成22年度から平成27年度）において、第一部（昼間部）では3年次末までに平均90%以上の単位を修得し、卒業生の90%が標準修業年限内で卒業している。
- 毎年度半期ごとに実施している学生による授業評価では、「授業で新しい知識や考え方を得ることができたか」との設問において、第一部、第二部（夜間部）ともに毎回90%が肯定的な回答となっている。

観点2-2「進路・就職の状況」について、以下の点から「期待される水準にある」と判断した。

- 第2期中期目標期間における大学院進学率は、第一部では65.4%から69.7%、第二部では10.5%から28.1%の間を推移している。また、就職率は、第一部では95.3%から97.8%、第二部では81.7%から93.1%の間を推移している。
- 平成26年度に実施した卒業生及び大学院修了生の就職先関係者に対する基礎知識・基礎能力獲得に関するアンケート（4点満点）では、専門分野の基礎知識3.4点、情報とメディアの活用能力3.2点、工学に対する倫理観3.1点となっている。

以上の状況等及び工学部の目的・特徴を勘案の上、総合的に判定した。

Ⅱ 質の向上度

1. 質の向上度

〔判定〕 質を維持している

〔判断理由〕

分析項目Ⅰ「教育活動の状況」における、質の向上の状況は以下のとおりである。

- 平成 26 年度に学習ポートフォリオを整備し、分野別に学習成果を可視化して修得状況を把握することにより、効率的かつ効果的に学習指導を行う体制を整備するとともに、平成 27 年度から卒業研究のルーブリックによる達成度評価を実施している。

分析項目Ⅱ「教育成果の状況」における、質の向上の状況は以下のとおりである。

- 工学教育総合センターのキャリアサポートオフィスにおいて、キャリア教育を実施しており、第 2 期中期目標期間において年度平均 104.7 名の学生がインターンシップを経験している。

これらに加え、第 1 期中期目標期間の現況分析における教育水準の結果も勘案し、総合的に判定した。

工学研究科

I	教育の水準	教育 2-2
II	質の向上度	教育 2-4

I 教育の水準（分析項目ごとの水準及び判断理由）

分析項目 I 教育活動の状況

〔判定〕 期待される水準にある

〔判断理由〕

観点1-1「教育実施体制」について、以下の点から「期待される水準にある」と判断した。

- 急速に進展するナノ工学に関する研究を最先端医療や最新創薬の研究に応用展開するため、平成 25 年度に名古屋市立大学大学院薬学研究科と共同ナノメディシン科学専攻を設置している。また、当該専攻の円滑な運営を行うため、協議会を設置し、教育、研究等に関する事項を協議している。
- 教員の教育及び研究活動等に関する評価を継続的に行うため、学生による授業評価アンケートと同じ項目で授業担当教員による自己点検評価を実施し、教育活動の改善を促しているとともに、教員評価に基づき優秀な業績の教員を表彰するなど、教育の質の向上に取り組む体制を整備している。

観点1-2「教育内容・方法」について、以下の点から「期待される水準にある」と判断した。

- 各専攻の教育目的を達成するために体系的な教育課程を編成しており、産業戦略工学専攻におけるベンチャー構築やものづくり経営等に関する科目の開講及び工学以外の専門分野の教育機会を提供するための名古屋市立大学等との単位互換等の取組を行っている。
- 就職相談、キャリア形成に関する各種セミナー、就職ガイダンス、インターンシップ事業等による就職・キャリア支援の充実を図っており、インターンシップ科目履修者は、平成 22 年度の 102 名から平成 27 年度の 203 名となっている。

以上の状況等及び工学研究科の目的・特徴を勘案の上、総合的に判定した。

分析項目Ⅱ 教育成果の状況

〔判定〕 期待される水準にある

〔判断理由〕

観点2-1「学業の成果」について、以下の点から「期待される水準にある」と判断した。

- 第2期中期目標期間（平成22年度から平成27年度）における標準修業年限内の修了率は、博士前期課程では94%から97%、博士後期課程では51%から76%の間を推移している。
- 毎年度半期ごとに実施している学生による授業評価では、「授業で新しい知識や考え方を得ることができたか」との設問に対する肯定的な回答は、93.1%から98.7%の間を推移している。

観点2-2「進路・就職の状況」について、以下の点から「期待される水準にある」と判断した。

- 第2期中期目標期間における博士前期課程の就職率は97.9%から99.5%の間を推移しており、製造業、建設業、情報通信業等のものづくりに関連する業種への就職者は90%となっている。また、博士後期課程の就職率は83.3%から97.8%の間を推移している。
- 平成26年度に実施した就職後2年から5年経過した修了生の就職先関係者に対する実践・展開能力の獲得に関するアンケート（4点満点）では、「専門分野の専門技術に関する知識・能力」は平均3.20点、「ものづくり実践能力」は平均3.22点となっている。

以上の状況等及び工学研究科の目的・特徴を勘案の上、総合的に判定した。

Ⅱ 質の向上度

1. 質の向上度

〔判定〕 質を維持している

〔判断理由〕

分析項目Ⅰ「教育活動の状況」における、質の向上の状況は以下のとおりである。

- 平成 25 年度に名古屋市立大学大学院薬学研究科と共同ナノメディシン科学専攻を設置しており、薬学と工学の融合分野における人材を育成する体制を整備している。

分析項目Ⅱ「教育成果の状況」における、質の向上の状況は以下のとおりである。

- 平成 23 年度及び平成 26 年度に実施した就職後 2 年から 5 年経過した修了生の就職先関係者に対する実践・展開能力の獲得に関するアンケート（4 点満点）では、「専門分野の専門技術に関する知識・能力」は、平成 23 年度の平均 3.06 点から平成 26 年度の平均 3.20 点、「ものづくり実践能力」は、平成 23 年度の平均 3.15 点から平成 26 年度の平均 3.22 点となっている。

これらに加え、第 1 期中期目標期間の現況分析における教育水準の結果も勘案し、総合的に判定した。